

Monthly Report

2021年2月号

特集

歩行者の保護

～左折について～

警察庁の発表によれば、コロナ禍の昨年、全国の交通事故死者数は前年から376人、11.7%減少の2,839人となり、初めて3,000人を割りました。

その一方で、東京都の死者数は22人、16.5%増加し、全国順位がトップとなり、また、他の大都市を抱える都道府県も減少幅は平均を下回りました。このことから、近年、都市部や市街地における歩行者との交通事故の危険は、むしろ高まっていると考えます。

今号では、歩行者事故の現状を確認し、左折時を中心にその危険性と対策について考えましょう。



歩車分離式信号の導入された交差点

1. 歩行中の死亡事故が最も多い

◆我が国は、市街地における死亡事故が多い

日本での交通事故による死者は、他の先進国に比べて、市街地で多く発生しています。国別に、全死者数に対する市街地での死者数を見ると、フランスの28%、ドイツの30%に対し日本では55%と、ほぼ2倍に達しています。※1

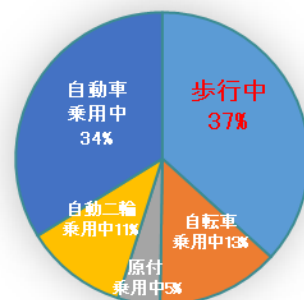
※1.国土交通省Webサイト「生活道路をとりまく環境」
https://www.mlit.go.jp/road/ir/ir-council/life_road/pdf01/4.pdf(2021.1.15.閲覧)

◆死亡事故の中で、歩行中の死亡が最も多い

2019年に発生した交通事故死者数3,215人の内、歩行中の死亡は全体の37%を占めており、最も大きな割合となっています。その次に、自動車乗用中の34%、自転車乗用中の13%が続きます。※2

※2.警察庁Webサイト「交通事故統計」
<https://www.npa.go.jp/publications/statistics/koutsuu/toukeihyo.html> (2021.1.19.閲覧)

状態別死者数(2019年)



◆歩行中の死亡事故例

この1月3日に、東京・世田谷で弟のベビーカーを押していた9歳児童が左折車にはねられる痛ましい死亡事故が発生しています。左折事故については、昨年2月にも、東京・虎ノ門の交差点で、左折して来たワゴン車に8歳児童がはねられ死亡する事故がありました。

市街地での歩行者の保護には、交差点での左折事故を防ぐことが、ひとつのポイントになると考えます。



損保ジャパン

SOMPO 保険の先へ、挑む。

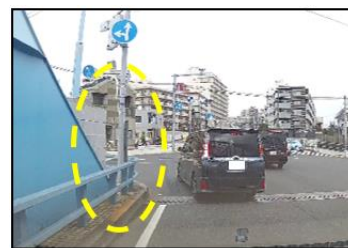
2. 左折における危険性の特徴

左折における危険性について、あらためて確認しましょう。

(1) 大きな死角

右側に運転席がある車両が左折する場合には、車両構造から助手席や同乗者の存在も影響し、左側方から左後方にかけて大きな死角が発生します。

また、近年増加した車高の高い車両は、この死角がより大きくなり注意が必要です。



構造物による死角

(2) 近い歩行者

左折する場合、車両は、交差点を横断する歩行者と近接した場所を通過します。歩車分離式信号でない場合は、歩行者も左折車両も青信号と対面するため、同時に交差点に入ることになり、常に接触の危険が伴います。

特に信号の変わり目は、歩行者が急に走り込んで来ることもあり、一層の注意が必要です。



暗闇による死角

3. まず止まること

ある大手バス事業者は、左折時に横断歩道の手前で必ず一旦停止して、安全確認することを徹底しています。大型車両は死角が大きいことから当然の行動と思われるかもしれませんが、左折時の危険性を考えれば、ドライバー全体で励行すべき安全行動と考えます。以下に左折時の注意事項をまとめましたので確認してください。

- ・正しい運転姿勢で、左側方などの視界を確保する。
- ・ミラー類に頼り切らず、顔を向け、左側方や前方の横断歩道の安全を確認する。
- ・左折前に、横断歩道の手前で、いつでも止まれるように、十分に速度を落とす。
- ・確認できない場合、見えないものがある場合は、必ず止まる。
- ・左折中は、一定の低速を保持し、アクセルを踏み込まない。
- ・歩行者や自転車の黄色信号や信号無視による横断も予測する。
- ・黄色信号で、無理に交差点に進入し左折するのは厳禁

**左折時は、死角に歩行者などがあるかもしれないと考え
横断歩道の手前で一時停止しましょう。**

損害保険ジャパン株式会社

〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
<公式ウェブサイト> <https://www.sompo-japan.co.jp>

SOMPOリスクマネジメント株式会社

〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-24-1
<公式ウェブサイト> <https://www.sompo-rc.co.jp>

お問い合わせ先

